

## 会えなかった祖父の故郷

平成 27・12

私が生まれる前に、二人の祖父は亡くなっていた。父方の祖父を偲ぶよすがは何も残っていないが、母方の祖父の写真だけは何枚か残っていて、猟犬を従え、猟銃を手に、鼻下に髭を蓄えた姿が凛々しかった。六尺豊かで色浅黒く、精悍な感じの人だったと、祖母が遠い目をして語ってくれたことを思い出す。

祖父は、東浅井郡虎姫町中野の庄屋の家の次男に生まれたが、明治になって田畑を売らざるを得なくなり、実家は没落していったようだ。朝鮮総督府に勤めていた祖父は、当時大流行したスペイン風邪に罹り、30代の若さで京城で亡くなってしまう。

母はその6日後に生まれた。祖父の無念はいかばかりであったろう。10年ほど前、思い立って祖父の実家の在所を訪れ、カメラに収めた時、何故かこみ上げるものがあった。「おじいちゃん、会いに来たよ」と心の中で会話をした。ルーツを大切にしなければと、しみじみ思ったことである。

私は、京都の大学に通っていたので滋賀県とはつながりが深い。近江舞子に泳ぎに行ったり、ヨットに乗せてもらったり、車で琵琶湖一周したこともある。竹生島にも渡った。学友も滋賀県人が少なくなかった。バスケット部の先輩は、今も米作り・酒米作りに精を出し、我が家はその江州米を送ってもらって食べているし、酒米は、マキノの吉田酒造の「かじや村」「花嵐」として結実している。

今や人気の住宅地大津には友人ふたりが大阪から移住した。

井上靖著「額田王」は愛読書である。大好きな司馬遼太郎も、白州正子も滋賀をこよなく愛する作家だ。とはいえ、自分に滋賀県人の資格があるとは思ってもみなかった。

何年前か、東京での滋賀県人会の集いに誘われ、初めて友人のご主人が滋賀県人であることを知る。縁とは、自ら求めなくとも自然に引き寄せられるものなのかもしれない。今は孫関係で忙しく、いろいろなイベントになかなか出られないけれど、お誘いくださったご縁を大切にしていこうと思っている。

山下玲子（大田区在住・虎姫町出身）